



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 7

Nov. 2002

目 次

大会・講演会のご案内

日本植物分類学会第2回大会および2003年度総会のお知らせ.....2

2002年度日本植物分類学会関西地区講演会の御案内.....6

会長および評議員選挙の結果について.....7

評議員追加選出結果について.....7

お知らせ

次期庶務幹事、会計幹事について.....8

会計幹事からのお知らせ.....8

2002年度野外研修会報告

2002年度日本植物分類学会野外研修会実施報告.....9

新方式の野外研修会.....11

2002年度野外研修会に参加して.....12

書評

これから論文を書く若者のために.....14

増補・原色日本のスマレ.....16

野外観察ハンドブック 校庭のコケ.....17

連絡員から秋便り

亜熱帯の島便り・3・.....18

シダ便り・3・.....19

会員消息.....24

大会・講演会のご案内

日本植物分類学会第2回大会および2003年度総会のお知らせ

日本植物分類学会第2回大会準備委員会

日本植物分類学会第2回大会を以下のように開催いたします。

【会場】

神戸大学 百年記念館（発表会場・総会）・瀧川記念学術交流会館（懇親会）

【日程】

- | | | |
|----------|----------------|-----------|
| 3月14日(金) | 【14:00-17:00】 | 公開シンポジウム |
| | 【17:10-】 | 評議員会 |
| 3月15日(土) | 【09:30-11:30】 | 口頭発表 |
| | 【12:30-13:30】 | 総会 |
| | 【13:30-14:20】 | 記念講演 |
| | 【14:20-17:00】 | ポスターセッション |
| | 【17:30-19:30】 | 懇親会 |
| 3月16日(日) | 【09:00-12:00】 | 口頭発表 |
| | 【13:00-15:00頃】 | 口頭発表 |

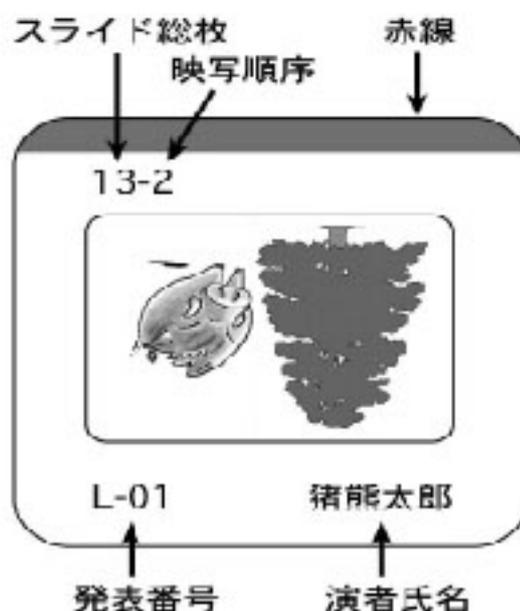
【発表の要領】

一般講演 時間は、講演12分、質疑応答3分の計15分です。デジタルプロジェクター、35mmスライド映写機、OHPおよびビデオ（NTSC/VHS）を用意いたします。発表・参加申込書に希望する発表媒体を記入してください。

- ・デジタルプロジェクター：Windows 2002 と Macintosh (Mac OS 9.2) のパソコンを用意いたします。Microsoft PowerPoint でファイルを作成し、CD-RまたはCR-RWに焼き付けたものをご持参ください。焼き付けたCDは必ず動作確認をさせていただくようお願いします。当日の操作は係員が行います。

- ・35mmスライド：スライドには「発表番号」「演者氏名」「スライド総枚数-映写順序」を記入し、プロジェクターにセットする際に上になる縁に赤線を引いてください。スライド映写は係員が行います。

ポスター ポスター発表用の掲示板は横90cm、縦180cmです。左上角に講演番号を貼るための余白（縦横10cm）を残してください。参加受付が終了次第、ポスター会場（百年記念館）にてポスターを掲示してください。画鋏などは各自でご用意願います。3月15日午後の記



念講演後にポスターセッションを行います。なお、今大会ではポスターセッションの時間をより多く確保するため、ポスターフラッシュは行いませんので、あらかじめご了承ください。

【大会参加費（講演要旨代を含む）】

1月17日まで	3000円（一般） 1000円（学生）
1月18日から3月1日まで	4000円（一般） 1000円（学生）
要旨集別売価格	1000円

【懇親会】

3月15日（土）午後5時30分より、瀧川記念学術交流会館で行います。神戸ならではの趣向を凝らした懇親会を企画しておりますので、ふるって御参加ください。

1月17日まで	4000円（一般） 1500円（学生）
1月18日から3月1日まで	5000円（一般） 2000円（学生）

【昼食】

3月15日（土）は隣接する工学部の食堂（徒歩5分程度）をご利用になれますが、3月16日（日）はキャンパスの食堂は営業しておりません。ご希望の方に弁当（800円）をご用意いたしますので、発表・参加申込書に希望日を記入し、大会参加費・懇親会費とともに所定の費用を払い込みください。大学周辺には食堂がありません。

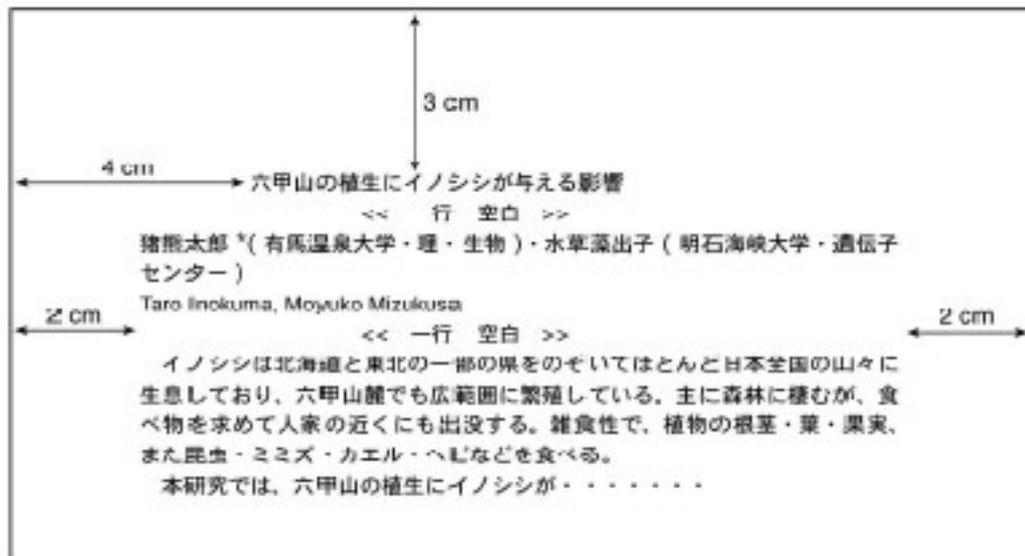
【参加申込方法】

できる限り電子メールにて発表・参加申込をしていただくようお願いします。別紙の「発表・参加申込書」にしたがって必要事項を記入し、flora@kurcis.kobe-u.ac.jpまで送信してください（添付書類にしないでください）。送信してから3日経っても（土日・祝日を除く）こちらから受信の返事がない場合は、タイトルに「再送信」と記入の上、同じメールを送信してください。電子メールをご利用できない方は、別紙の「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会事務局まで郵送またはファックスしてください。

【要旨】

本大会では指定の用紙を同封していません。凡例（次ページ）に従って、A4の用紙1枚に文字サイズ12ポイント以上でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白が必要です。発表題目、発表者氏名と所属、発表者氏名（英語）、要旨の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「*」を入れてください。図や表を入れても構いませんが、グレイスケール（ハーフトーン）原稿は印刷の際つぶれてしまうおそれがありますのでご注意ください。要旨はそのままB5サイズに縮小して印刷・製本いたします。原稿はプリントアウトしたものを大会準備委員会事務局あてに郵便でお送りください。電子メールまたはファックスによる送付は受け付けませんのでご注意ください。

< 要旨例 >



【申込の締め切り】

発表・参加申込 1月17日必着(電子メール、郵便またはFAX)

発表要旨原稿 1月31日必着(郵便のみ)

大会参加費・懇親会費等振込 3月1日まで(1月18日以降振込の場合は金額が異なります)

【申込用紙・要旨原稿の送付先】 申込はできる限り電子メールにてお願いします。

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学・内海域機能教育研究センター

日本植物分類学会 第2回大会準備委員会

FAX: 078-803-5951

【参加費送金先】

口座名義: 日本植物分類学会 第2回大会準備委員会

郵便振替口座番号: 00960-1-183614

【宿泊施設】

神戸周辺にはたくさんの宿泊施設がありますので、大会準備委員会の方では特に宿泊施設を斡旋いたしません。参考までに主な宿泊施設のホームページと連絡先を挙げておきます。

三宮ターミナルホテル(三ノ宮駅中央口から徒歩0分)

〒651-0096 兵庫県神戸市中央区雲井通8-1-2 JR三ノ宮駅中央口

TEL: (078)291-0001 ホームページ: <http://www.hotels.westjr.co.jp/sannomiya/>

神戸東急イン(三ノ宮駅から徒歩4分)

〒651-0096 神戸市中央区雲井通6-1-5

TEL: (078)291-0109 ホームページ: <http://kobe.tokyu-inn.co.jp/>

ホテルサンルートソプラ神戸(三宮駅から徒歩7分)

〒651-0084 神戸市中央区磯辺通1-1-22

TEL: (078)222-7500 ホームページ: <http://www.sopra-kobe.com/>

ホテルヴィアマーレ神戸(三宮駅から徒歩8分)

神戸市中央区京町6-7-2

TEL: (078)321-0067 ホームページ: <http://www.h-viamare.co.jp/>

神戸三宮ユニオンホテル（三ノ宮駅中央口から徒歩20分）

〒651-0087 神戸市中央区御幸通2-1-10

TEL: (078)242-3000 ホームページ: <http://www.unionhotel.jp/>

パレス神戸（元町駅西口北から徒歩5分）

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5-1-16

TEL: (078)371-7800 ホームページ: <http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~palace/>

新神戸オリエンタルホテル（新神戸駅から徒歩1分）

〒650-0002 神戸市中央区北野町1

TEL: (078)291-1121 ホームページ: <http://www.orientalhotel.co.jp/1/lmain.html>

六甲山ホテル（阪急六甲駅からシャトルバスで20分）

〒657-0101 神戸市灘区六甲山町南六甲1034

TEL: (078)891-0301 ホームページ: <http://www.653.co.jp/>

【大会に関する問い合わせおよび連絡先】

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学・内海域機能教育研究センター

日本植物分類学会 第2回大会準備委員会

電話: 078-803-5957 (小菅桂子)

ファックス: 078-803-5951 電子メール: flora@kurcis.kobe-u.ac.jp

なお、大会に関する案内や最新情報は以下のホームページでご覧になれます。

<http://www.kurcis.kobe-u.ac.jp/kurcis/flora/>



会長および評議員選挙の結果について

選挙管理委員長 菅原敬

日本植物分類学会ニュースレター - No. 6 で公示した会長および評議員選挙の開票結果をお知らせいたします。開票は2002年10月5日に東京都立大学牧野標本館会議室において、本学会会員の宮本太氏、藤井紀行氏の立ち会いのもとで、選挙管理委員の仙仁径・梶田忠両氏の協力を得て行いました。投票総数が少なかったのは残念ですが、結果は以下の通りです。

【会長】

当選	加藤 雅啓	46
次点	戸部 博	13

(有効投票 105 票)

【評議員】

当選	角野 康郎	37
	永益 英敏	36
	邑田 仁	34
	伊藤 元己	32
	田村 実	25
	北川 尚史	22
	西田 治文	22
	秋山 弘之	18
次点	岡田 博	18
	大場 秀章	17
	高橋 英樹	17

(有効投票 105 票)

秋山弘之氏と岡田博氏は同票数でしたが、抽選の結果、秋山弘之氏に決まりました。なお、評議員選挙において、同票数の場合の選出規定がないため、会長選出の細則(抽選によって当選者を定める - 役員等の選出についての細則第2条3)に従い、抽選で行いました。

評議員追加選出結果について

評議員 角野康郎

選挙管理委員長の報告にありますとおり、次期評議員として8名(秋山弘之、伊藤元己、角野康郎、北川尚史、田村実、永益英敏、西田治文、邑田仁)が選挙によって選出されました。「役員等の選出についての細則」第4条の規定に基づき、私たち8名の合議により次の4名の方を評議員として追加選出しましたので報告いたします。

今市凉子(日本女子大) 高橋英樹(北大) 原田浩(千葉中央博) 堀口健雄(北大)

お知らせ

次期庶務幹事、会計幹事について

庶務幹事 梶田忠

次期庶務幹事は国立科学博物館の遊川知久さんが、会計幹事は東北大学の横山潤さんがお引き受け下さることになりました。これに伴い、2003年1月1日から、学会事務局連絡先と会計連絡先が、下記のように変更になります。お間違えなきよう、ご注意下さい。

事務局・庶務幹事

〒305-0005 つくば市天久保4-1-1
国立科学博物館筑波実験植物園内
日本植物分類学会
遊川 知久
電話: 0298-53-8475
Fax: 0298-53-8998
E-mail: yukawa@kahaku.go.jp

会計幹事

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻
横山 潤
電話 :/Fax: 022-217-6689
E-mail: jyokoyam@mail.cc.tohoku.ac.jp

会計幹事からのお知らせ

会計幹事 高野温子

今年も残すところあと僅かとなりました。本学会の会期は1月から12月となっております。本年度会費を未納の方に払込取扱票を同封しておりますので、会費の納入をお願いいたします。入れ違いで既に会費を納入されていた場合にはご容赦ください。また、会費の自動振替のお申込みも、引き続き受け付けております。書類に必要事項をご記入、ご捺印の上11月末までに会計幹事にお送り下されば、2003年度会費分から自動振替で会費を納入頂けます(それ以降に書類が届いた場合には、2004年度からのご利用になります)。

2002 年度野外研修会報告

2002 年度日本植物分類学会野外研修会実施報告

宮崎市 南谷忠志

2002年度野外研修会は「キバナノツキヌキホトトギス咲く秋の日向路の花の観察」として、宮崎県で開催されました。宮崎県は、島嶼や特殊地形等があるわけではないのに固有種が多く、またソハヤキ植物の宝庫といえましょう。幸い、交通不便で陸の孤島であったためか、開発が遅れ、これらの植物は残されてきました。しかし、近年になって開発の波が押し寄せています。今回は、その一端を観察し、宮崎県のフローラの概要を掴んで頂くことを目的に貸し切りバスで各地を回ることになりました。県中部で、固有種のキバナノツキヌキホトトギス・キバナノホトトギス・ウラジロミツバツツジを、県北部で、現在大規模農地整備中のオグラコウホネ・ヒメコウホネが群生し、ミクリ類や南限のヌマゼリ・オニナルコスゲ等20種ほどのRD植物が生育する低層湿原を観察しました。他にも東海要素のナガバノイシモチソウ・ヘビノボラスが生える中間湿原、豊富な水田植物、日本唯一の自生種オオバネムや絶滅寸前のミズキンバイなども観察しました。本州では見ることの出来ない多くの希少種の出現に感激されていたようでした。

期日：2002年9月27日（金）～29日（日）

研修内容：

27日：夕方ホテル集合、講話（九州～宮崎のフローラ；南谷忠志）ホテル泊

28日：終日野外研修、夕食時室内研修（北川町の湿原の開発と保護；南谷忠志・矢原徹一）ホテル泊

29日：終日野外研修、15時に駅・空港解散

参加者：伊藤元己・梶田忠・加藤雅啓（東京）、長谷川義人・堀内洋（神奈川）、内藤宇佐彦（静岡）、西田佐知子・吉田國二（愛知）、須賀瑛文（岐阜）、山脇和也（三重）、村瀬忠義（滋賀）、権藤啓子・永益英敏（京都）、織田二郎・田村実・平野弘二（大阪）、黒崎史平・福岡誠行・布施静香（兵庫）、田中昭彦（鳥取）、福原達人・福原美恵子・矢原徹一（福岡）、黒木秀一・南谷忠志・室屋瀧雄（宮崎）：計26名

見学場所及び出現した主な植物：以下のとおりです。

児湯郡川南町新茶屋湿地：ナガバノイシモチソウ、ヘビノボラス、サクラバハノキ、ミズギボウシ、サギソウ、シロイヌノヒゲ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、コモウセンゴケ、サワシロギク、ミカワシンジュガヤ他

児湯郡川南町細尾鈴山麓込ノ口（260m）：ナガバサンショウソウ、ミズワラビ、スズメノハコベ、ミズマツバ他

児湯郡都農町尾鈴山麓キャンプ場入り口（420m）：キバナノツキヌキホトトギス、コウヤマキ、ウラジロミツバツツジ、ヒュウガミツバツツジ、スズコウジュ、キバナノホトトギス、ツゲモチ、クロバイ、シロバイ、サツマルリミノキ他

児湯郡都農町上征矢原 (100 m): ヒメノボタン

日向市美々津町田の原 (200 m): キバナノホトトギス、ミズギボウシ、ムカゴニンジン、イヌノヒゲ、クロホシクサ、ヒロハイヌノヒゲ、ゴマシオホシクサ、ミズネコノオ、マルバノサワトウガラシ、ミズキカシグサ、マシカクイ、ヒメシロネ他

日向市平岩鶏毛 (170 m): スブタ類 (マルミスブタ、スブタ、ヤナギスブタ or ミカウスブタ or 雑種)、ミズネコノオ、ヒメノボタン、ニッポンイヌノヒゲ、クロホシクサ、ホッスモ、車軸藻類 (シャジクモ、ケナガシャジクモ、フタマタフラスコモ、カラスフラスコモ; 須賀瑛文さんの同定。4種もあったそうです)

東臼杵郡東郷町福瀬福瀬神社 (40 m): ハナガガシ、シロバイ、オガタマノキ他

東臼杵郡北川町家田、川坂湿地 (10 m): コウヤワラビ、ミズワラビ、サクラタデ、サイコクヌカボ、ナガバノウナギツカミ、サデクサ、オグラコウホネ、ヒメコウホネ、ゴキヅル、ヌマゼリ、ホソバノヨツバムグラ、オオユウガギク、ヌマトラノオ、イヌゴマ、ミズオオバコ、キタガワヒルムシロ (角野新称)、ナガエミクリ、ウマスゲ、オニナルコスゲ、ミズガヤツリ、アゼガヤツリ、ツルナシコアゼガヤツリ、クログワイ、カンガレイ、ハタベカンガレイ、エンシュウベニシダ、オニグルミ、フジツツジ、オンツツジ、アオカズラ他

延岡市片田町 (5 m): オオバナム

宮崎市山崎町 (3 m): ミズキンバイ、ヌマゼリ、シログワイ、クロタマガヤツリ、ミズワラビ、ミソハギ、スズメノハコベ他



貴重な植物に沢山出会い、大満足の参加者たち

新方式の野外研修会

頌栄短期大学保育科 福岡誠行

今年の野外研修会は9月27日から29日にかけて、南谷忠志さんのお世話で、宮崎県でおこなわれました。これまでの野外研修会と違って貸切バスで要所要所を案内していただきました。28日は7時に食事、7時40分にホテルを出発、まずナガバノイシモチソウとヘビノボラズを見せてもらいました。今は図鑑などで絵や写真がみられるので知ってはいますが、実物をしかも自生の状態で見ると感動です。バスで移動して、尾鈴山の入り口へ移動しました。ここではキバナノツキヌキホトトギスの鮮やかな黄色い花に再会できました。実はうん十年前に訪れたことがあったのです。

休耕田ではスブタ、マルミスブタ、ヤナギスブタなどが群生していました。ずっと以前にスブタを採り、酢豚を連想し、妙な名前の植物があるものだとおもった記憶がよみがえりました。

延岡市片田町ではあれがオオバナムですとおっしゃる。オオバナムは初島先生の鑑定によると説明された。聞いたこともない名前だし、わざわざ案内してくれているのだから、きっと珍奇なものだろうと思っていました。図鑑で調べると、宮崎県の海岸に知られ……とあります。納得です。

今回は貸切バスを十分に活用した新方式による野外研修会でした。南谷さん、ご苦労様でした。



キバナノツキヌキホトトギス

2002 年度野外研修会に参加して

九州大学理学府生態科学 福原美恵子

9月27日(金)から29日(日)にかけて、2002年度の植物分類学会野外研修会が、宮崎県宮崎市を起点に延岡市まで、日向灘に沿って北上する行程で行われました。

今回が初めての参加でしたが、琵琶湖をフィールドにしていた私にとっては、他地域での湿地環境を観察できるなにもかえがたい機会でしたので、早々に申し込みを済ませていました。今年の九州は梅雨から夏にかけての雨量が少なく、観察にも支障がでるかもしれないと、前もってお知らせいただいていたのですが、結果的にこの不安は杞憂に終り、大変充実した観察会になりました。

9月27日

17時、宮崎市内の宮崎第一ホテルに集合。一時雨が降り、翌日の天気不安になる。ほぼ全員がそろったところで、世話人の南谷忠志さんにスライドを交え、宮崎の植物相の特徴をお話いただく。聞いたこともなかった植物、名前だけは知っているものの初めて見る植物に、翌日からの観察への期待が膨らむ。

9月28日

7時40分出発。曇り空ながら雨の心配はなさそう。バスに乗り込み、平らな小高い丘が続く海岸段丘を左手に、日向灘の海岸線を右手に見ながら北上。8時半、川南町新茶屋湿地着。コサギの群れる池、廃養鶏場の脇をすり抜けると、サワシロギクの白い花が点々とした小さな湿地があらわれた。ミミカキグサ類、ナガバノイシモチソウ、コモウセンゴケ等に座り込んで見入る。次にバスは、名貫川沿いに徐々に山深く進み、キバナノホトトギスがちらほらと咲く児湯郡尾鈴山キャンプ場で停止。川沿いの遊歩道を少し入り、キバナノツキヌキホトトギスを川向いから双眼鏡で観察(乱獲により人の手の届くところには見られなくなってしまったそう)。車道わきの土手で観察できたキバナノホトトギスは丈が低く、花卉の色も淡く、今朝まさに開いたという風情も可憐であったが、キバナノツキヌキホトトギスは崖から下垂した茎の左右にくっきりとした山吹色の花をつけた様子が凛々しい。自然岩がむき出しのトンネルをくぐり、しっとりとした空気の中、木本を中心に観察、行程中キノコも観察できた。シロオニタケ、ニガクリタケ、ダイダイイグチ、ヒラタケなど。

早めの昼食後、植林地脇の斜面でナガバノサンショウソウ、畠脇の土手にヒメノボタンを、場所場所でバスを止めていただき観察。その後は、日向市美々津町田の原、平岩鵜毛で水田の植物を観察して過す。前者は耕作放棄後1年とのことで、茂った草の間で泥に足をとられながらも、ホシクサ類、ミズネコノオ、ムカゴニンジン等を、後者は刈り取り後ながら水が残る棚田を、一枚ずつ畦からのぞきこみ、キクモ、スブタ類、シャジクモ類を観察。その後、福瀬神社でハナガガシを観察し宿泊先の日向ハイツへ向かう。

ハイツ前の広場で皆さんが熱心に標本の整理をされているのに後ろめたい思いをしながらも海岸を散策。急な斜面を降りると、岩場が波打ち際まで掘り鉢状に広がっており、

ハマナタマメ、ハマカンゾウ、ハマナデシコが岩に張り付くように生育していた。

夜は、翌日の観察地である北川について、南谷さん、矢原徹一さんからこれまでの保全のとりくみについての講演を聞く。後に南谷さんから当地では「藻がり」として用水路に生えた水草を刈り取り、水田に肥料として入れるという作業がかつては行われていたということをお聞き、琵琶湖では同じ作業が「藻とり」と呼ばれていたことと重ね合わせ、実体が失われたとき用語も失われるということを考える。

9月29日

7時40分出発。空はよく晴れ上がっていた。東臼杵郡北川町家田のあたりは過去何度も水害に見舞われ、家々は基礎を高く盛り上げ、さらに家屋の一階部分を車庫、物置にするなど工夫されている。土地改良工事予定のある場所で思いきり採集。腰くらいの高さにサクラタデ、サイコクヌカボ、ナガバノウナギツカミなどが茂っている。刈り取り間近のよく整備された田の中にも、ミズワラビ、オモダカ、イボクサなどが見られた。水路にはキタガワヒルムシロ、ナガエノミクリ。皆、三々五々散らばって採集に精を出す。11時後ろ髪を引かれながらも出発、バスの中で昼食を取り、延岡市片田町でオオバネムノキをちらりと見て、最後の観察地である宮崎市内のシーガイア裏の水田でカヤツリグサ類を思う存分採集。水路で僅かに咲き残ったミズキンバイの花を観察後、3時過ぎに宮崎空港着。帰宅の途につく方、九州をもう少しまわってゆかれる方、それぞれの予定にあわせ解散。

南谷様には用意周到なコース設定、土地の所有者への事前連絡、そして研修会中の私達のとりまとめ（なにしろ、田圃に放されたカルガモのように、すぐに散らばる、おいしいものをみつけると一目散に目指す、集めようとすると思われない、のですから・・・）など大変お世話になりました。

皆さん熱心で（カモに例えて申し訳ありません）大変楽しく充実した時間を過ごさせていただきました。お礼申し上げます。



スブタ類の生える美しい棚田を観察する

書評

これから論文を書く若者のために

著 酒井聡樹 発行 共立出版
2002年5月25日発行 A5版 256ページ
定価 2,500円(本体)

第1部 論文を書く前に

- 第1章 なぜ、論文を発表するのか
- 第2章 論文を書く前に知っておきたいこと

第2部 論文書きの歌：執筆開始から掲載決定まで

- 前奏1 どこまで研究が進んだら論文にしてよいのか
- 前奏2 共著者の再確認と著者の順番
 - 1番 構想練ったら雑誌を決めよう 必ずあそこに載っけるぞ
 - 2番 タイトル短く中身を要約 書き手のねらいをわからせよう
 - 3番 イントロ大切なにをやるのか どうしてやるのか明確に
 - 4番 マテメソきちっと情報もらさず 読み手が再現できなくちゃ
 - 5番 いよいよリザルト中身をしばって 解釈まじえず淡々と
 - 6番 山場は考察頭を冷やして どこまでいえるか見極めよう
- 間奏 効率の良い執筆作業
 - 7番 関連研究きちっと調べて 引用するときゃ正確に
 - 8番 本文できたらアプスト書こうよ 主要なフレーズコピーして
 - 9番 複雑怪奇な図表はいけない 情報減らしてすっきりと
 - 10番 文献集めと文献管理は 日頃の努力が大切だ
 - 11番 完成したなら誰かに見せよう 他人のコメント必要だ
 - 12番 お世話になったらお礼を言わなきゃ 一人も残さず謝辞しよう
 - 13番 最後の仕上げは英文校閲 英語を磨いて損はない
 - 14番 いよいよ投稿お金を惜しむな 特別便なら早く着く
 - 15番 いつまで経っても返事が来なけりゃ 控えめメールで問い合わせ
 - 16番 リフリーコメントなるべく従え できないところは反論だ
 - 17番 リジェクトされても挫けちゃいけない 修正加えて再投稿
 - 18番 このうた歌えば必ず通るよ 自分を信じてがんばろう

第3部 わかりやすく、おもしろい論文を書こう

- 第1章 誰のために書くのか
- 第2章 わかりやすい論文を書こう
- 第3章 おもしろい論文を書こう

本書は、初めての論文をこれから書こうとしている大学院生や学部生、論文を書いたことはあるが今ひとつコツがつかめていない大学院生や若手教官・研究者、そして学生の論文書きを指導する立場になったばかりの若手教官など向けに書かれた「論文書きの手引き書」である。論文を書く際に、イントロダクション(イントロ)、材料と方法、結果、考察などの各章で何を書くべきかを著者が作詞した「論文書きの歌」にしたがって具体的に紹介している。また、わかりやすくおもしろい論文を書くコツも紹介されている。これらの中でも特にイントロを書くコツはおもしろい(著者は「イントロ折り紙」と称している)。自分の研究で「何をやったか」を説明するのはやさしいので、これを起

点にして「どういう現象（事実、研究の現状、既存の知識などを）を見て、この研究をしようと考えたか」「なぜ今回着目している現象（あるいは研究の現状）が問題なのか」を考える。さらに再度、起点の「何をやったか」に戻って、「どういう着眼で、その研究をやろうとしたか」を考える。そして、これらの順序を入れ替えて、「どうしてその研究をやったのか」も明確に示したイントロを書くというやり方である。イントロを書くのにもいつも苦労している人は一度試してみるとよいだろう。また、本書には随所に悪い例（有名な雑誌に実際に載った論文から選び出したもの）も挙げてあって、わかりやすい。よい例よりも悪い例を見る方が、著者の言いたいことが一目瞭然だからである。この点でもよく工夫されている。

本書の著者の酒井君は、東大の大学院生時代、私の2学年下だったので、彼が新入り状態から1人前の研究者として育っていくまでの全過程を私は身近で観察させてもらっていた。彼は、よい論文をたくさん書きたいという意志は研究室の誰にも負けないくらい強かったが、自分の研究結果を論理的に整理したり、それを論文にまとめることに関しては、かなり要領の悪い方だったように思う。論文原稿をつくっては、教官や他の院生にボロクソに批判され、実際に投稿しても何度もリジェクトされて悔しがっていたのを覚えている。しかし、自分自身の論文書きの要領の悪さから逆に「論文書きのコツ」を学び、それを論理的に（他人にも容易に伝えられる形で）整理していたことが本書を読むと良くわかる。なお著者の名誉のために言っておくが、現在では酒井君は論文書きの名人である。最近でもたまに、酒井君は「コメントを下さい」といって論文のドラフト原稿を私のところに送ってくることもあるが、本当によく書けていると感心している。本書は、酒井君が自分の経験から学んだ論文書きのコツの集大成である。わかりやすい論文を書くためのコツがつかめていない人はもちろん、生まれつき論文書きの要領のよい人（こういう人は論文の書き方を他人に教えるのが下手であることが多い）にも、参考になるところが非常に多いと思う。

また同時に、酒井君は、「よい論文とは何か」、「おもしろい論文とはどのようなものか」も院生の頃から真剣に考えていた人である。特にイントロでは、その研究で「何をやったのか」は誰にでも書けるが、「どうしてやったのか」もきちんと説明することが非常に重要であると説いている。「どうしてそのような研究をしたのか、それは、そのようなデータがない（発表されていない）からだ」としか書いていないのが最悪のイントロである、研究とは無数にある「わかっていないこと」の中から何か一つをあえて選んで調べる行為であるからとも述べている。自分の研究で取り組んだ問題が研究者自身で整理できていないことは、結構よくあることかもしれない。冒頭でも紹介した著者オリジナルの「イントロ折り紙」は論文書きだけでなく、読者が自分の研究を整理して見つめ直すのにも役立つように思う。その意味で、本書は既にたくさん論文を出している人にも十分一読の価値がある。

最後に、本書の原稿段階のものを私が京大で指導している院生達（先生がそうだから

かもしれないが、あまり素直でない若者達。目上の人から説教をされるのが大嫌い。)に見せたところ、彼らにはすこぶる評判が悪かった(私には非常に意外だった)。酒井君が示しているおもしろい論文の条件がきつくて「かちん」と来た(お説教ぼく聞こえた)こともあるのかもしれないが、彼(彼女)らのいうには、本書に書かれてある論文書きのコツの大半を既にわかっている(例えば著者のいう「イントロ書きのコツ」が本当につかめていたかは疑問だが、院生達がいうには自分たちはこれくらい十分わかっている)とのことである。) それでもなお自分たちは論文書きに非常に苦労している。したがって、実際に多くの院生達が論文書きでつまずいているポイントは、本書でコツが示されているところとずれているのではないかというのである。本書では、要領の悪い院生達が一般的にどこでつまずいて論文が書けないでいるかのリサーチが全くなされていないというのが、院生達の最大の批判点であった。先にも述べたが、酒井君は最初から「よい論文が書きたい」という意志の非常に強い院生だった。彼ほど意志・意欲の強くない院生達が論文を書こうと思いついた時にしばしば陥る別の問題点もあるかも知れない。私自身は、本書は非常に完成度が高いと思っているが、改訂版や続編をつくる機会があれば、院生達の批判にも答えてもらえればなお幸いである。

(京都大学大学院理学研究科植物学教室 村上哲明)

増補・原色日本のスミレ

浜栄助 著・神山隆之 編集 発行 誠文堂新光社

2002年7月発行 330頁

定価 28,000円(本体)

スミレ属の図譜としては井波一雄氏の日本のスミレ図譜(1966)と浜栄助氏の原色日本のスミレ(1975)が未だ双璧である。各種の特徴を示すよう工夫された写真集も多く出版されているが、同定にはその植物をよく知っている人による線画がより役に立つ。原色日本のスミレは彩色され、品種などの細かい特徴も示されている。この本が、19図版を追録され、再刊された。追録された図版は浜氏の遺品の中にあつたもので、追録32種類の内30種類が雑種であるのは氏ならではである。記載は編集にあつた神山氏による。他に原色日本のスミレ以降のスミレ属に関する最新ノート、浜氏によるスミレの有茎種と無茎種の雑種についてなども追録されている。

浜氏の視点に基づいて「原色日本のスミレ」は up-to-date になったが、未だ研究者により種の認識に相違があつたり、種の同定に容易な検索表がないなど、神山氏の言葉を借りればスミレ学は未知の世界が無限に広がっている興味ある分野である。この本を契機にスミレ属の理解がいつそう進むことが期待される。(頌栄短期大学 黒崎史平)

野外観察ハンドブック 校庭のコケ

著 中村俊彦・古木達郎・原田浩 発行 全国農村教育協会，東京

2002年 発行191頁

定価 1,905円（本体）ISBN 4-88137-092-8

身近な生き物観察をとおして自然のしくみの理解に役立てるために企画された全国農村教育協会の野外観察ハンドブックシリーズの第8冊目として、このたび「コケ」が取り上げられ刊行された。表題には本書の利用を限定するような「校庭の」という見出しが掲げられているが、このキャッチフレーズによって筆者がまえがきでことわっているように、教育の場での利用と身近な生物でありながら知られざるコケについてその世界へ誘おうとするものである。たくさんのコケの写真があることから、一見したところ名前調べのための図鑑に見えるが、じっくりと中身をみるとそれは観察に力点をおいた他の図鑑類にない特色をもっている。

植物学的にいうコケ植物だけでなく、地衣類を含むゆるやかな一般的な理解にある通称「コケ」と呼ばれる生物について、本書ではその生態や分布をはじめ、形態、分類について解説をおこない、また、コケをつかった学習の仕方の例などを紹介している。著者らは現在コケ植物、地衣類の生態学あるいは分類学の研究で活躍している千葉県立中央博物館の研究者で、本書でその活動の一端を披露している。

本書では校庭のコケとして190種が取り上げられ、また、用語解説文と図によって本書のコケ生態観察ハンドブックとしての役割が付与されている。関東地域以外のひとたちにも、身の回りのコケの生態図鑑として手ごろな利用価値の高いものと評価されることは間違いない。センタイ類の仲間分け、地衣類の仲間分けの方法として、区別する特徴を表にし、しかも生育環境を記号化した斬新な検索ツールが提供されており、大変面白い。さらにセンタイ類のなまえを調べるために顕微鏡で観察するばあいに役立つ特徴を最小限の解剖図で効果的に与えられていて、これにも著者らの工夫とアイデアが窺え、ひと味ちがった味わい深い出版物である。研究に裏打ちされた内容に筆者らの自信さえ感じさせられる。ぜいたくな感想かもしれないが、この小型の本にしては内容が盛りだくさんに詰め込まれていてちょっと息苦しい印象をもった。しかし、本書はコケ学入門書として安くて内容豊富なものとしてお奨めのものである。

（広島大学 出口博則）

連絡員から秋便り

亜熱帯の島便り・3・

琉球大学・理・海洋自然科学科 傳田哲郎

秋で一むん（秋だもの）

十月初旬、寒露の頃。沖縄では、南を目指して渡る鷹の話題を耳にし始める季節。サシバやアカハラダカといった小型の鷹たちが先島諸島の空に高く舞い、亜熱帯の島々に秋の到来を告げる。この時期、寒冷前線の南下に伴って降る小雨を“タカヌシーバイ（タカの小便）”と呼んだりするが、今年の鷹は今のところ御行儀が良いようである。十月の声を聞いてからも、しばらくの間、爽やかな秋晴れの日が続いていた。

そんな中、久しぶりにパソコンの前を離れ、沖縄島北部の山原（やんばる）に出かけた。目指すは国頭郡大宜味村の、とある河川である。目的地に着くなりいそいそと長靴に履き替え、溪流の中を学生さんたちとともに水音をたてながら歩いてゆく。真夏の蒸し暑さは既に影を潜め、川面を滑ってくる風がひんやりと心地よい。長靴を通してでさえ、水の冷たさが感じられるようになった。周囲のシイ林では、オオシマゼミが独特の金属的な声を響かせている。「でーじ、ぬちぐすいやっさー」（“とても命薬だね”の意。“命薬”は、心を癒してくれるもの、満たしてくれるもの等に対して幅広く使われる言葉。）とでも言いたくなるような、そんな軽快な気分させられる。

さて、植物は如何にと目をやれば、意外に花が少ないのに気づかされる。夏の名残が、ピンク色をしたハシカンボク（ノボタン科）の花がぼつぼつと咲いている。溪流沿いの岩上では気の早いリュウキュウツワブキ（キク科）が黄色い花を咲かせているが（図1）最盛期はもう少し先である。ナガバハグマ（キク科）のつぼみもまだまだ堅い。咲き始めるのは年末だろうか。沖縄の秋は、長い夏と短い冬の端境期。溪流沿いの植物達も役者交代の季節である。ちなみに、もともと沖縄には秋という言葉は無く、その代わり九月下旬から十月にかけての頃を“白夏（シィサナチィ）”という言葉で表現していたそう。直訳すると“衰えた夏”。沖縄では斯くも夏の存在が大きいのかと、改めて感じさせられる。

言うまでもないが、ひとたび大雨が降ると渓流域の環境は激変する。川を歩きながら上を見上げると、この夏の台風で増水した時のものか、地上から数メートルの位置に木の枝が束になって引っ掛かっているのが見える。



図1 リュウキュウツワブキ

オキナワウラジロガシの倒木も見られる。改めて見直すと、溪流環境に適応しているはずのリュウキュウツワブキでさえ、ずいぶんと葉の痛みが目立つようだ。その一方で、傷んだ葉とは対照的に、多くのリュウキュウツワブキが生き生きと花茎を伸ばしているのが印象的である。沖縄にミーニシ（新北風）が吹き、冬の足音が聞こえてくる頃、ティダ（太陽）の恵みの黄色い花が、溪岸を明るく彩ることだろう。ちょうどこのニュースレターが皆さんのお手元に届く頃だろうか。その頃になったら、また、山原へ出かけてみよう。リュウキュウツワブキ以外にも、ナガバハグマ、アオヤギバナ（キク科）など、冬の溪流を彩る植物たちが、可憐な花を咲かせているに違いない。

と、来るべき冬の日思いを馳せながら、この通信文を書いていたときのことである。山原へ採集に行った学生が帰ってきて言うには、「先生、エゴノキが咲いてましたよ。イジュも咲いてるし」。何だろう、この季節感の無さは。若夏を象徴するイジュの花が、冬を目前に控えたこの時期に咲いているのである。亜熱帯の島の植物達には、やはり、“てーげー主義”（ものごとを深刻に考えずに適当にやろうという考え方）がよく似合うということか。

シダ便り・3・

熊本大学 高宮正之

私はこれをやった、そして貴方にはこれをすすめる

暑くて雨の少なかった今夏は、栽培している研究材料が甚大な被害を受けました。湿気を特に好む種類では、いくつかのプランターのラベルが墓標になってしまいました。幸い被害は解析が終わった株だけでしたが、研究材料、それも実験が終わって目を離しがちな株の、維持管理は難しいものです。

今回は、“自分がこれまでシダ植物分類学に残した功績のうち一押しのこと(論文でも新発見のものでも)”と、“これまでシダ植物に無関心だった分類学会会員に勧める本や論文と簡単なコメント”に対するアンケート結果です。お答えは2001年10月時点ですので、以降功績が増えた方もおられるでしょうが悪しからず。

これぞ私の功績（アルファベット順、本名は伏せてあります。）

D 悟法Sさん「イノデ類の雑種の胞子を調べていたときに見つけたアポガミーの胞子による識別。イノデ属の分類に、葉の裏の微小鱗片が有効形質であることを見つけたこと。シダ植物の主要なグループの配偶体の実物を観察できたこと」。E 老原Aさん「まだこれからです（高宮注：そうだ！頼むぞ若者！！）」。H 林H樹さん「日本産オシダ属シダを対象として細胞地理学的観点からまとめた“Cytogeographical studies on Dryopteris of Japan. Hara-Shobo, Tokyo, 1974.”。シダ植物における種内倍数性問題を扱った“Problems of intraspecific polyploidy in the pteridophytes of Japan, in Proceeding of the International Symposium on Systematic Pteridology, Beijing, pp.95-108, 1989.”」。H 谷部M泰さん「シダ植物葉緑体の特異的構造変異の発見と、葉

緑体DNAライブラリーの作成。このライブラリーはこの後の葉緑体DNAを用いたシダの分子系統学的研究ほとんど全てに用いられた“Chloroplast DNA from *Adiantum capillus-veneris* L., a fern species (Adiantaceae); clone bank, physical map and unusual gene localization in comparison with angiosperm chloroplast DNA. *Curr. Genet.* 17: 359-364, 1990.”。シダの1科をのぞいた全ての科、主要な属の系統関係を明らかにした。シダ類の主要な系統関係を明らかにしたこと、とりわけ、異形孢子シダ類が同型孢子シダ類に含まれること、木本性シダ類の単系統性などの新発見があった“rbcL gene sequences provide evidence for the evolutionary lineages of leptosporangiate ferns. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 91: 5730-5734, 1994.”。花の咲かない植物での花器官形成遺伝子の初めての詳細な報告。シダの発生進化研究のさきがけ“Characterization of MADS homeotic genes in the fern *Ceratopteris richardii*. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 95: 6222-6227, 1998.”。I川Hさん「子が親のクローンになるはずの無配生殖種で、対立遺伝子の分離がおこっている可能性を示したもの「無配生殖種トウゴクシダにおける同祖染色体の対合、日本植物学会第60回(福岡)大会, 1996”」。I槻K男さん「“生きていくこと - 分類学を科学に *Biohistory* 3: 26-30, 1995” (高宮注: Iさんからはアンケートのお答え代わりにこの冊子をお送りいただき、これまでは高宮がこの中から勝手に抜粋しました。今回は皆様これをお読み下さい)」。I市R子さん「学問に貢献したという点では、担根体の発生を明らかにした研究。個人的にも東南アジアの熱帯に行き始めるきっかけになった研究で思い入れがある“Developmental anatomy of the shoot apical cell, rhizophore and root of *Selaginella uncinata*. *Bot. Mag. Tokyo* 102: 369-380, 1989.”と“Developmental study of branched rhizophores in three *Selaginella* species. *Amer. J. Bot.* 78: 1694-1703, 1991.”」。K藤M啓さん「現在は支持されていないが「ハナヤスリ科が生きた前裸子植物である」と提唱したこと。分子系統はこの科がマツバラ科と単系統をなすことを示しているが、これについては十分な検討が必要である。また、セラム島(インドネシアモルッカ諸島)のシダ植物相。これを通じてシダの多様性を考えるようになった」。K田S郎さん「だれでも簡単にシダの染色体が観察できるようになるきっかけをつくったこと」。M本Fさん「形態の変化の面白さやシダ植物の繁殖様式に興味があることから、“ホシダとケホシダおよび自然雑種の形態変異. 国立科学博物館専報 22, 1989”と“川崎市におけるシダ植物の繁殖生態. 川崎市自然環境調査報告 3, 1994”」。M上N明さん「日本国内に限って、しかもシダ植物の分類学に限定しなければ、分子系統学的手法を日本中の植物分類学の研究室に「早く」普及させたことかもしれない。分岐分類学を取り入れる時点では、何歩もリードしていた昆虫分類学者が、6-7年も遅れてやっと、分子系統学的手法の有効性に気づいた(今、大々的に分子解析が行われている)のを見ると、「早く」普及させるのに成功したことの意義は大きかったと思っている。一方、シダ植物の分類学に限定すれば、シダ植物に形態で識別できない種(隠蔽種)がたくさんあることは以前から知られていたが、DNA(一番解析が簡単なrbcL遺伝子)の塩基配列情報が、これらの隠蔽種を認識する上で一般的に有用であることを明らかにしたこと。私たちの研究手法は、そん

なに遠くない将来にシダ植物の種分類の標準的な研究方法になると思う（現在は、それほど評価を受けているわけではないが...）。M山S樹さん「1990年くらいから出した始めたミズワラビに関する一連の論文」。M本Sさん「“ミヤマワラビの2生殖型の東日本における分布パターン”。Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B 8:102 - 110, 1982.”と“Flavonoid variation and evolution in *Asplenium normale* and related species (Aspleniaceae). J. Plant Res. 107: 275-282, 1994.”。N田H文さん「木生シダの化石研究でしょうか。代表的なのは、“Anatomical studies of the frond axis of the Cyatheaceae.s.l., with a revision of permineralized frond axis from the Cretaceous of Japan, in, Contributions to the Botany in the Andes I. Academia Sci. Book, Tokyo, pp. 5-80, 1984. (D.Sc. thesis)”と“Structure and affinities of the petrified plants from the Cretaceous of northern Japan and Saghalien V. Tree fern stems from Hokkaido. *Paracyathocaulis oqurae* gen. et comb. nov., and *Cyathocaulis yezopteroides* sp. nov. Bot. Mag. Tokyo 102: 255-282, 1989.”。N藤N実さん「Takamiya (1996)にある自分の報告した結果すべて(1つ1つ思い出がありますので)」。N村T久さん「北アルプス、南アルプスにカラフトメンマの分布を明らかにしたこと。新種シロウマイタチシダの発見。タカネメンマ、オクヤマイヌワラビ(未記載)、コシノサトメシダ(芹沢さんが記載した)などを見いだしたこと。武蔵恩方でイワヤシダの新分布、千葉、清澄山でミゾシダモドキの新分布地。伊豆八丈島のイヌワラビ類3種の記録。最近では、南太平洋のシダ研究、などでしょうか。台湾のシダの思いでも沢山あります」。S橋N男さん「半地下性の配偶体を持つハナワラビ類には雑種ができないと言われていたが、1979年に伊豆大島から雑種を発見し、論文にできたこと。その後数種の雑種をやはり伊豆大島から報告したこと」。S原Wさん「功績はなにもないですけど、ナチシケシダに4倍体のほかに5倍体と6倍体があってそれらの倍数性が葉の大きさと関連していることを明らかにしたこと」。T宮M之さん「役に立っているという意味では“Index to Chromosomes of Japanese Pteridophyta”。いろいろなことをきちんと整理できたものとしては“ミズニラ属の自然誌と分類。植物分類、地理 50:101 - 138, 1999”」。YR子さん「やり残しが多くて、特にありません(高宮注:そんなことはありませんよ。少なくとも私は、学生時代にYさんのコケシノブ科の前葉体の論文を読んで感激しました)」。Y田辺Y子さん「オオタニワタリの仲間にもいろいろあるぞ!!ということを経験に印象づけ、まだまだシダの分類学的研究もすべきことが多いとアピールした」。以上21名からのお答えです。私が想像していたものとはずいぶん違った功績を挙げられた方もおられました。皆さんご自分のお仕事への思い入れは格別ですね。

私はこれを勧める

1. 名前を知ろう

文献は二の次で、まずは野に出てシダに出会い、触れ、名前を知ることが、4名の方が推奨されています。「私はシダ植物に興味を持ち始めた方に最初に薦めている本は光田重幸『しだの図鑑(保育社)』です。これはシダの見分け方が簡単に書かれており写真、図

もあり非常にわかりやすい。検索表もよくできている。値段も(1600円)お手ごろ。」

2. この本や論文を読もう

倉田悟・中池敏之編『日本のシダ植物図鑑1 8巻(東京大学出版会)』(3名)「大部分は採集者名の入った証拠標本付分布図、解析を待つ生の情報源、研究材料入手に大変便利」。「フラクタル図形のようなシダの葉の形の美しさ」。益山樹生『シダ類の生殖(豊饒書館)』(2名)「生殖と新しい個体の誕生は生命の現象のなかでもっとも面白いものの一つにあげられると思いますが、この本ではシダ植物の生殖について現在までわかっていることについて詳しく書いてあって、大変勉強になりました」。「シダの繁殖様式について詳細に書かれていて、「あんな地味な植物もこんなに複雑な繁殖様式をして、頑張っ子孫を残しているのだなあ」と、実感させられる一冊です」。岩槻邦男『日本の野生植物シダ(平凡社)』(2名)「図鑑の中に「研究を要する」とか「解析が必要である」とか書かれていて研究意欲がわく」。「図鑑の記載文を丁寧に読むと、問題点が浮かびあがってくるので、研究しなければならない事が自然に理解できる」。岩槻邦男『シダ植物の自然史(東京大学出版会)』「私自身が育った研究室の雰囲気や根本にあるシダ植物に対する研究姿勢が書かれている。シダ植物についてどのような研究テーマがおもしろいかは、時代と共に刻々と変わっていく。シダ学に取り組む姿勢こそ永遠性があるような気がする。後輩に伝えていける部分も研究に取り組む姿勢しかないと考えているから」。加藤雅啓『植物の進化形態学(東京大学出版会)』「シダ植物の器官の多様性や起源について興味深く書かれた本である。シダ植物だけを扱っているわけではないが、本を読み進むにつれ、陸上植物全体の中でのシダ植物の面白さが再認識されるはずである」。Takamiya M. 'Index to chromosomes of Japanese Pteridophyta (1910-1996) Japan Pteridological Soc.' 「信頼のおける数値、記載が記録され、かつ no information として、今後調査すべき未知のシダが指摘されていて貴重な資料である(高宮注: <http://dapc.sci.kumamoto-u.ac.jp/pterid/topdb.html> で最新情報が得られます)」。'Haufler, C.H. 1987. Electrophoresis is modifying our concepts of evolution in homosporous pteridophytes. Amer. J. Bot. 74: 953-966.' と 'Haufler, C.H. 1989. Towards a synthesis of evolutionary modes and mechanisms in homosporous pteridophytes. Biochem. Syst. Ecol. 17: 109-115.' 「植物には倍数体が多い。つまり、素直に受け取れば、植物には染色体数が増えることによって進化するなんらかのしくみがあるということである。そのしくみは、まだまったくわかっていない。最近になって、その糸口がシダ植物の研究から与えられる可能性が大になってきた。このように、その特性から、シダ植物の世界にはいろいろな重要な問題がたくさん転がっている。花の咲く植物もいいが、花の咲かない植物もばかにならない」。Camus, J.M., M. Gibby and R.J. Johns (eds). 'Pteridology in Perspective - Proc. Holttum Memorial Pteridophyte Symposium, Kew 1995.'

3. その他

「シダ植物は、陸上植物の基本とも言うべきものです。ぜひ、その意外な多様性について興味を持っていただきたいと思います」。「古典を再認識してほしい。最近の植物関係

の雑誌は見ていておもしろくない。線や構造式ばかり。素晴らしい植物の線画はどこへ消えてしまったのか。たまに出くわすとホットする。」「孢子体世代を中心に関わってきた私というのも変かもしれないが、配偶体世代がこれからのシダ研究の目玉になると思う。」「若い世代の方々は、シダに特化するのではなく、対極的な視点で、植物科学の中におけるシダ植物の重要性が判断できるようになるのが大事だと思います」など。また、「シダにはまると抜け出せなくなるので気を付けましょう」という注意もありました。

3回のアンケートを通して読むと、研究に対する姿勢・テーマ・方法の宝箱で、いろいろなヒントが溢れています。もったいないもったいない。私が今から始めるならば、やっぱりシダ植物を研究対象に選ぶでしょう。でも、今回の皆様の貴重な意見を参考にして、
を して したらきっと素晴らしい研究になるだろうな(中身は秘密)。貴方もシダ植物に材料を乗り換えたらいかがですか？興味をもたれたならば以下の団体が役立つでしょう。

「日本シダの会」今年(2002年)創立50周年を迎えました。会の案内には、「男でも女でも、若い人も老人も専門家も、一切区別しないシダ愛好家の集まり」と書かれています。セミプロの方々が中心になっておられますが、特記すべきは日本のシダ植物図鑑18巻の出版でしょう。会員が資料収集から分布図作成、線画の描画までボランティアで協力し、開始から22年かけて完成したものです。世界的に見ても例が無い出版物でしょう。年1度の全国大会や、各地の支部での活動、年3回の日本シダの会会報の発行により、シダ植物の研究や栽培について普及をはかっています。連絡先は、〒156-8502 世田谷区桜ヶ丘1-1-1 東京農業大学森林総合科学科 中村武久宛。

「日本シダ学会」1957年に創立された本学会は、「シダ植物を対象や材料として研究する人が、互いにその研究について話し合い、シダ学の発達に寄与するのを目的とする」ものです。大学関係者が多いのですが、日本シダの会のメンバーも多数会員です。年1回のシダ学会会報の発行と植物学会開催時に関連集会での発表、情報交換及び親睦を図っています。関連集会(と終了後の二次会)を欠かさず継続している学会は日本シダ学会だけではないでしょうか。また、私が管理しているシダの染色体データベースは、日本シダ学会によって作られたものです。連絡先は〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学院理学研究科生物科学専攻 加藤雅啓宛。

以上、高宮が発信したシダ便りは今回で終了です。アンケートに協力いただいた方々、お読みくださった方々どうもありがとうございました。得てして変わり者扱いをされがちなシダの研究者が身近になりましたでしょうか？シダ研究の魅力が少しでも伝わりましたら幸甚です。

会員消息

編集後記

今年度最後のニュースレターです。完璧な編集で有終の美を飾ろうとしましたら、上手く(?)レイアウトしすぎて編集後記を書く場所がほとんどなくなってしまいました…。とにかく、原稿をくださった皆様、本当にお世話になりました！私は居残りでも来年も編集を担当します。原稿お待ちしております！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学博物館
西田佐知子

電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

2002年12月31日まで

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
日本植物分類学会 高野温子(会計幹事)
Phone 0795-59-2012, Fax 0795-59-2019
E-mail: takano@nat-museum.sanda.hyogo.jp

2003年1月1日より

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻
日本植物分類学会 横山潤(会計幹事)
Phone: /Fax: 022-217-6689
E-mail: jyokoyam@mail.cc.tohoku.ac.jp

平成14(2002)年11月12日印刷

平成14(2002)年11月20日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町
発行人 名古屋大学博物館
西田佐知子

発行所 東京都文京区白山3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
日本植物分類学会
郵便振替 00120-9-41247